



# Finland Artists' Studio Foundation アーティスト・レジデンシー交換プログラム 2017

# 目次

- Ⅰ. 寄稿「新たなコラボレーションと将来の展望」|リイカ スオミ-カンデ
- Ⅱ. はじめに「AIR交換プログラムの始まり」|村田達彦
- Ⅲ. 交換プログラム 2017概要
- IV. 2017年 活動エッセイ
  - 1. 「薄明の日光浴 / Soaking up the Twilight」 | 吉田和生
  - 2. 「2ヶ月間の滞在」 | マイヤ・ルートネン

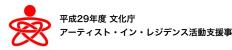
付録 FASF, Youkobo 紹介











## 「新たなコラボレーションと将来の展望」

リイカ・スオミ-カンデ / フィニッシュ・スタジオ・ファンデーション・コーディネーター

フィンランドの作家の間では近年アジアへの関心が高まっていることもあり、Finnish Artists' Studio Foundation (以下FASA) は遊工房アートスペースと2016年に交換レジデンシー協定を結べたことをとても嬉しく思っています。

本交換プロフラムの一環として、2017年5月から6月の間、吉田和生さんをタピオラ・ゲスト・スタジオにお迎えすることができました。レジデンシー期間の終盤、吉田さんはヘルシンキのカラサタマ・スタジオ・ビルディングで展示を行いました。なんと今回のレジデンシーは新しいプロジェクトの出発点となり、吉田さんは今後それを展開するためにフィンランドに戻ってくるご予定も立てられたようです。また、 FASAから遊工房アートスペースへ、マイヤ・ルートネンを派遣することができ、彼女が制作とリサーチにとても適した環境に滞在できたことにも喜びを感じています。この二つのレジデンシーが二人の作家のそれぞれのキャリアを豊かにし、また彼らの国際的な発展にも貢献できたことを願っております。

我々は遊工房アートスペースとの実りある協力関係を誇りに思っています。遊工房アートスペースは高い標準とプロ意識を保っており、滞在する作家たちに与えられるサポートや施設も素晴らしいものだと伺っております。この度、遊工房のスタッフの皆様に素晴らしいご協力を賜れたこと、作家を暖かくお迎えいただいたことに多大な感謝を申し上げます。これからも良好な関係が継続され、作家たちが交換レジデンシーにより多くの利益を得られることを心より期待しております。

## Finnish Artists' Studio FoundationとTapiola Guest Studioについて

FASAは作家に制作場や住居を提供し、制作状況の全体的な質の向上を目的としてFinnish Artists' Associationが設立。フィンランド内にあるFASA関連施設の居住者は現在300人ほどにのぼる。

作家の国際化支援として、国外での制作機会を提供するため、FASAはエスポーという街にあるタピオラ・ゲスト・スタジオでレジデンシーを運営。タピオラ・スタジオは首都ヘルシンキから8キロほどの場所に位置している。1955年の建設当初から美術作家専用施設として建てられ、作家向けの住居兼スタジオスペースが10戸用意されている。1997年より、そのうちの1戸は FASAが運営するレジデンシーに使用。

タピオラ・ゲスト・スタジオに滞在する作家は交換プログラム、時には公募により招待される。FASA は実用的な補助やネットワークを提供し、作家が有意義な経験ができるよう支援している。

当レジデンシーはArts Promotion Centre Finland (アーツ・プロモーション・センター・フィンランド)とエスポー市の支援により運営されている。

http://ateljeesaatio.fi/english/index.html



## 「フィンランドの作家向けスタジオの運営・管理団体・FASFとの交換プログラムの始まり」

村田達彦 / 遊工房アートスペース共同代表

2015年5月、Finnish Artists' Studio Foundation(FASF)より交流プログラムへのお誘いの話があり、双方の作家交換の可能性の検討に入った。FASFは、ヘルシンキに本部がある、フィンランド内の作家スタジオの運営をしている1990年設立の非営利団体である。国内の4個所のスタジオ・ビルなど7カ所のワーキングスペースを運営管理、また、海外の幾つかの類似機関(イタリア、スペインほか)との作家交換プログラムを展開している。

秋真っ盛りの9月初め、ヘルシンキのオフィスを訪ね、代表のTuula Paalimakiさん、担当のRiikka Suomi-Chandeさんとお会いし、ヘルシンキ郊外エスポー市のタピオラ・ゲストスタジオを案内頂くことが出来た。1955年頃に開発された広大な集合住宅を中心とした森の中の団地の一部にあり、バルティック海に面した海岸の近くの森の中に在るスタジオ連棟の一つで、交換プログラムの対象となる施設である。首都ヘルシンキにも近く、制作に集中できる素晴らしい環境にあり、連棟の一部は長期利用の作家住宅を兼ねたスタジオがあり、地元の作家との交流が自然に始まる環境と思えた。

早々、覚書を交わし2017年から相互に1組ずつの交換プログラムが始まることになった。交換の条件整備に当たっては、派遣作家の経費的な支援を派遣国側で責任を持つ方式とした。充実した交流を期待して、持続可能な仕組みの工夫を引き続き重ねていきたいと考えている。

ヘルシンキ訪問は、FASFのスタジオ訪問した日が、偶然に日本からの作家の滞在最終日に当たり、体験者本人から直接、滞在制作などの実態も伺う機会ともなったこと、また、フィンランドの北I市にあるマイクロレジデンスKulttuurikauppilaのAIR開設10周年記念の祝いへの出張機会とも合わせることができる幸運に恵まれた。

# 2017年交換プログラムの概要



・日本からフィンランドへ:

吉田和生・写真家

2017年5月1日~6月30日

6月18日~20日: 「Kazuo Yoshida Show」滞在制作の成果発表として ヘルシンキのKalasatama Studio Building1Fで開催。

フィンランドから日本へ:

Maija Luutonen・美術家 2017年10月1日~11月30 日

11月22~26日:「untitled」滞在制作の成果は遊工房にてオープンスタジオとして開催。

滞在はパートナーの美術家・Olli Keranen及び娘・Ainaの3人。

2017年の上記活動成果報告会は、「FIN/JPN LAB #3 アート、レジデンスプログラム、異文化交流 関係者によるつどい\*'」として、参加作家及び多くのアート関係者の参加を得て開催された。尚、会では、8月-10月にラップランドと長野県東御市との芸術祭交流プログラムの成果報告も兼ねた。フィンランド側窓口ArtBeak,li、Finland、東京側遊工房。

\*'A gathering of Practitioners pondering the relationship of art, residency programs, and cross-cultural collaboration.'

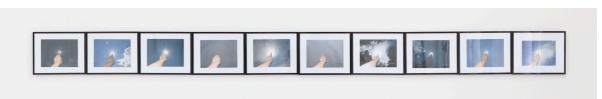
2017 年の5月から6月の二ヶ月間、私はフィンランド・アーティスト・スタジオ財団と遊工房アート スペースが共催するアーティスト・イン・レジデンスに参加した。このプログラムの期間、主催者からは滞在先として、ヘルシンキに隣接するエスポーのタピオラスタジオが提供された。一般に、アーティスト・イン・レジデンスの主催者は、それに参加するアーティストに、滞在先の場所の特性を生かした作品を制作すること、または、それに見合う調査や交流の成果をあげることを要請する。言い換えれば、特別な場合を除いて、アーティストはこれまでの活動や経験を、滞在先での調査を媒介とし、その場の歴史や風土、文化といった文脈へ接続させる必要がある(批判的な態度も含む)。

今回のレジデンスにあたって、私は事前に提出した提案書に、フィンランドがもつ特性「白夜」の空(光)を撮ること、それに基づく自身の過去作品「Air Blue」の再制作について記述した。ここで、日本語の「白夜」の定義を確認してみる。

- ・「白夜(びゃくや)」(はくや)とも。夜になっても太陽が沈まないか、薄明状態が長時間続く現象。薄明状態とは太陽が日の出・日没の際、地平線付近をほぼ平行に動くため、真っ暗にならない状態のことを指す。『出典|株式会社日立ソリューションズ・クリエイト「百科事典マイペディア」』
- ・「白夜(はくや)」高緯度地方で、夏、太陽が地平線近くに沈んでいるために薄明が長時間続く現象。 びゃくや。『出典|小学館「デジタル大辞泉」』

撮影を計画する際、私はそもそも日本では見ることのできない、これら「白夜」の曖昧な定義の理解 に苦戦した。問題であった点のひとつは、「白夜」を他言語に翻訳する際、一日中太陽が「見える/見えない」の違いによって、対応する語が変わることであった。繰り返し説明すると、「白夜」は太陽が「見える/見えない」に関わらず、夜間の薄明状態を示すものなのである。それでは何時から何時までが「夜」なのか、どの程度の明るさが「薄明」なのであろうか。結論から言えば、本文を書き終えるまでに「白夜」に完全に対応する語や、明確な定義を理解することはできなかった(もしくは完全に対応する語、明確な定義などそもそも存在しない)。下記は、「白夜」が定義する状況とそれに対 応する各国の語の関連を調べ、私なりに整理を試みたものである。事実確認が完全でない状態で、こういった文を提示することは非常に残念なことであるが、本レポート提出の締め切りを二度も遅らせている今、私が優先すべきは「白夜」の関係性ではなく、私個人の人間関係であると考え、今回は適当なところで文を終えさせて頂く。

「白夜」はフィンランド語で、「keskiyön aurinko」または、「yötön yö」と置き換えられる。 「keskiyön aurinko」は英語で「midnight sun /真夜中の太陽」を、「yötön yö」は「nightless night / 夜のない夜」を示す)。和英辞典で「白夜」を調べた際、それに対応する語として「midnight sun」と 「white night」、「white nights」が記載されていた。「midnight sun」とは――北緯 66.6 度以上、また は南緯 66.6 度以上の地域で起こる――特定の時期の夜に太陽が沈まない状態を示す。しかし、「midnight sun」は文字どおり太陽そのもののことであって、「白夜」を示す語ではない。次に、「白夜」を英語で直 訳すると「white night」であるが、これは英語圏では一般的に「眠れない夜」という意味が強く、「white nights」の方がより「白夜」という現象に近い表現とされる。なお、「white nights」はフィンランド語の 辞典で「yötön yö/ nightless night」と同じ表現であるとされる。 私の滞在先であるエスポーと近い緯度―― ロシアのサンクトペテルブルグは、白夜祭でも知られるように、「white nights」の名所である。ロシアの 「white nights」である「Белые ночи」は——60 度 34 分以上の地域で起こる——真っ暗になら ない薄明の状態を指す。話はすこし逸れるが、光の性質という観点では「midnight sun」は直接光であり、 「white nights / nightless night」は間接光に 分類することができる。以上のことが、滞在前から現段階の 間までに調べ、整理できた点である。こ こまでで、私が押さえれた最低限の要点は、滞在先であったエスポー で見ることができたのは 「midnight sun」ではなく、「白夜」であり「nightless night」であり「white nights」ということで あった。



滞在の当初は、前述した程度の「白夜」の分類さえ終わっていなかった。現地で出会う初対面の人と、自身の中でも曖昧であった「白夜」について会話するのが億劫だった私は、さしあたっての滞在目的を、 フィンランド北部のラップランドで「midnight sun」を撮影すること、としていた。しかし、一言でラップランドといってもその範囲は広く、その多くは過疎地域のため、明確な目的がなければ、移動時間や滞在費用を無駄にすることになる。私は観光客のように、アイコンとしての「midnight sun」 を見ることができる名所について、出会う人ごとに浅はかな質問を試みたのだが、当然それと呼応するような答えしか得ることはできなかった。私は日々、スタジオに貼ってあった北欧の地図を見て、私は今どこにいるのか、場所の特性とはなにか?という問いを虚しく繰り返すのだが、最後までその答えを得ることはできなかった。結局、滞在も一ヶ月をすぎ、成果展を前に焦った私は、この場所の特性ではなく、この場所――にいる私という身体(メディア)――の特性に問いを逸らし、どうにか成果展を乗り切ることになる。

エスポーを離れる最終日、仕事をおえた満足感と、帰国することの寂しさで私はとても感傷的であった。そのせいか、飛行場に向かう車の中で見た夜明けの空は、いつも以上に美しく感じ、私の心と思考を動かした。滞在中、同じフィンランドでも、極夜のようにオーロラを見ることのできない「nightless night」の中、私の残念な感性では、その空(光)に他の場所との明確な差異を見つけることはできなかった。しかし、それは視覚的に捉える空の色彩や、光の性質などにはなく、夜間(数時 間単位)における微細な光の連続――不可視のボリューム(量感)にこそ存在したのではないか。そして、それは夜間の測光量などで、数値的な差異を見ることができるのではないだろうか。これは私にとって、目の覚めるような発見であった。ロマンティックに言えば、二ヶ月間におよぶ薄明の日光浴は、私の感覚器を経由し、脳内へゆるやかに刺激を続け、その蓄積をもって、ついに脳のシナプスと接続したのである。冒頭に述べたように、アーティスト・イン・レジデンスへ参加するアーティストに要請されるのは、測光のデータを取ることではなく、場所の特性と接続することである。私はこの極めて些細で、曖昧な交流をもって、括弧書きの「アーティスト・イン・レジデンス」の成果とし、レポートという形で提示をおこなう。最後になったが、こういった思考と実践に集中することのできる機会を提供して頂いたフィンランド・アーティスト・スタジオ財団と遊工房アートスペースの皆様、活動報告と交流の場を設けて頂いたフィンランド大使館の皆様にお礼を申し上げ、この文を締める。





#### 吉田和生

1982年兵庫生まれ、東京都在住。2004年滋賀県立大学人間文化学部生活文化学科卒業。不確定な時間や空間、色彩といった要素を様々なメディアを用いて収集、再構築することで、現代における新たな指標を立ち上げる。主な展示に「Ruler」(G/P gallery、東京、2014)、「自然と人間:グロスに見渡すメディア芸術」(北海道立釧路芸術館、北海道、2014)、「写真の境界 Boundaries of Photograph」(横浜、横浜市民ギャラリー あざみ野、2014)、「メディウムの条件」(HAGISO、東京、2014)、「拡張される網膜 #2」(G/P+g3/ gallery、東京、2014)、「第2回京都国際写真祭」(ASPHODEL、京都、2014)、「Picturing Plants – 植物のイメージ」(群馬県立近代美術館、群馬、2013)、など。東日本大震災、それに伴う原発事故以降に福島県の森を中心に撮影した写真作品である「Air Blue」は2013年に「第16回文化庁メディア芸術祭」で審査員推薦作品に選出された。2012年「群馬青年ビエンナーレ」で大賞を受賞。

私は遊工房とフィンランドのアーティスト・スタジオ・ファンデーションとの交換プログラムの一環として、遊工房で2017年に10月と11月を過ごしました。滞在中の私の最初の計画は、将来のプロジェクトのためのリサーチを行い、新しい資料を集め、次のアーティストブックの作業を開始することでした。 AIRが始める数ヶ月前に、私は、新しいコミッション作品を制作し、2018年2月から、ヘルシンキのキアズマ現代美術館で個展を開催するように招待されました。この厳しいスケジュールのために、計画を少し前倒しして、滞在中にコミッションワークに取り掛かかりました。計画は、スペースのためのパネル、いくつかの彫刻と印刷シルクファブリックのインストールを作成することでした。

滞在中、まず日本の広範なイメージ文化を見ることを始めました。模様、版画、本、雑誌、グラフィックデザイン、看板などに夢中になりました。書かれた言葉や言葉を使わずに画像や看板の助けを借りてのみ暮らしていく方法を考えることに決めました。残りの画像を繕うことができるように必要最小限の情報が何かを見つけ出し試みる、ほとんど何もないものから立ち上げるには、以前の経験や学習した事柄やあなたの脳をまさに使う事になります。

私はまた、何度も転載して広げ、伸ばした初期のコミックス/木版画の白いスペースの希少な驚くべき使い方に非常に触発されました。そこに実際にスペースを記す必要はまったくありません。 すべてのことが空白の中で起こります。あなた自分自身を記すことも、この現実以外のどこかで想像することもできます。

私の滞在中、材料を集め、多くの美術館、本屋、店、材料の店、国宝を観に行き、庭園、建物などを訪れました。スタジオでは、先の作品のためにスケッチを始めました。 パネル用のスケッチを描き、印刷される布地用の画像素材を収集し、3Dスキャナを使用して彫刻を作り、その後にヘルシンキに戻った後に製作されました。キアズマで今展示している実際の仕事のほとんどは私がヘルシンキに戻ってからつくられましたが、その仕事は、AIR滞在で費やされた時間によって非常に多くの情報が得られました。

展覧会「パッチ」は、2月9日から2018年7月29日までキアズマ現代美術館で開催されます。 この作品はアルフレッド・コデーリン財団が支援する新しいコミッションワークです。

http://kiasma.fi/en/exhibitions/maija-luutonen/







Coldetine Collection About Name Support to Q, EN-

#### マイヤ・ルートネン

1978生まれ。ヘルシンキ(フィンランド)を拠点に活動しているビジュアルアーティスト。

主に紙に描画し、しばしば、その手法の属性を調べて限界を広げ、同時に作品の二次元性と空間性、そして表現そのものの概念を臨んでいる。この追究は、紙の表面にまで及び、時には浮き彫りのように扱うことによって裏側から形を表している。彼女の修練は、しばしば、空間的没入、人間と人工的環境や自然の関係、そしてそれらの様々な規模に傾注し語る。最近の作品では、一定の入力がある時の不安と忘我の間の振動、そして暗号化された主体と奇妙な天気に焦点を当てている。さもなければ平らな面を通した空間性を反映して、一見密閉された空間や「部屋」の概念を扱う。それは、私たちが住んでいる空間、外を覗く空間、物質とデジタルが段々と合体するように見える空間、美術が表されている空間でもある。

## フィンランドと日本のAIR交換プログラム

# フィンランドのアーティストスタジオファウンデーション (FASF) AIR

ゲストスタジオはタピオラスタジオビルの一部で、地元のアーティストのための9つの住宅スタジオもあります。 フィンランドのヘルシンキから8kmのエスポーに位置しています。

タピオラゲストスタジオは、フィンランドのアーティストスタジオ財団によって管理されています。 1990年に設立された財団の目的は、作業施設や住宅スタジオを維持して取得することによって、ビジュアルアーティストの労働条件を改善することです。 フィンランドにはおよそ300人のアーティストテナントがいます。財団は、主にアーティスト交流プログラムを通じて、1997年からタピオラゲストスタジオにアーティストを招待していますが、時には公募もあります。

## ホスト組織について:

フィンランドのアーティストスタジオ財団、FASF、www.ateljeesaatio.fi

2017年のエスポー/ヘルシンキ滞在者

滞在期間:5月から6月末まで

2017年参加者数:1名/吉田和夫/写真家

## 遊工房アートスペース

国内外のアーティストが一定期間滞在しながら制作する、アーティスト・イン・レジデンス(AIR)と、在京作家向けスタジオや、作品を展示・発表する非営利ギャラリーを主たる事業とし、同時に、芸術文化を通した地域活動を推進しています。「ユー(あなた・遊)」の「工房」として、アーティストの自律的な活動の支援を通し、多くの方に芸術文化を身近に体験できる機会と親しんで頂く場を提供しており、これまでに、約40カ国280人の海外からのアーティストを迎え、150人を超える若手国内作家の展示発表や芸術文化交流の場となっています。(2017年3月現在)

### ホスト組織について:

遊工房アートスペース、Youkobo www.youkobo.co.jp

2017年の遊工房滞在者

滞在期間:10月から11月末まで

2017年参加者数:1名 /Maija Luutonen/美術家